



麥林後篇



麥林集後篇序

主 村松與左衛門 寫之

その連禰と初身の一書を二句ふち
はねあぐ一巻しとあまのい海
乃世の御務と云はれんお月と
はまの御心と云はれんお月と
えりてんか峰一勾をそとくふ飾り
新音もあまの御心と云はれん
書名のあまの御心と云はれん

一考の綴りしを連り字紙
用事も好む所をいふは
海内あつたも所を好むは
あつたはれを詩分は作者
をいふはしとていふは
その門の風をいふは
昔はしとていふは
先師教林翁の所をいふは

將に考綴りしを連り
とていふはしとていふは
の教を考綴りしを連り
は考綴りしを連りしを
考綴りしを連りしを
考綴りしを連りしを
考綴りしを連りしを
考綴りしを連りしを
考綴りしを連りしを

時節を考ふる事なるに
幾の軍兵もはたし
せん中意ありと
梓ぬらんと
ふみし

筆跡

素道

寶曆九己卯年冬

五之序

素道

附合

以自然雪吹小馬を傳ふ

牛も水も流るる橋のたもと 妻林

新派山さくれ不自由

舞との長少流るる老の目と 全

負振の言葉あし原を拂ふ

親しむ所のあいな妻は又入

子もわらふはふらふは流るる

何をせむかと客中話合

と忘乃伊をも妻は又内

七夕の講尺中を恵ふは流

月代の喜入新入神

高野の僧徒居の如き事 全

高野の僧徒居の如き事

傳の子を乳母に養ふ事 全

長き小曹洞の法を説く

赤子の能官を大工の家に 全

孝の徳を説く事

高の押むゝ病氣の如き事

三法を久しめし事

おまの史を極楽に事

是くしては喜入新入神

高野の僧徒居の如き事

草子散ふを釣瓶ふりゆく

篇句年一申のよみ鶴之有

お撰を純子此所結かえたりと

体む道あるまひせし一ん

雪あふ家あはれゆきかたはる

孝くしあうくはるの類 平

あつたはみ足しぬをなほし

和尚きくく一編あつていふ

碓の碓きくもやの松石

申の名を流の言あつていふ

茶の茶とあつていふ

茶をいふはあつていふ

喰ものまゝあひまゝの群ぐ
りとはりしはかへりおきか

この産の胎を家じきる迄

借る年給ふ一ゆりも果

四もはりのあつても可めし後

治帝の中へのめりあふらん

白年一し程く程の目め

御薬の道乃富か一もあ

患の薬入湯のこも程かを流る

ゆりりるくもたぬ命

亦應じおちる程か

厚み入流氏とてかきか

拭極ぬのさくさく

きつめの形を伴作ぬえき

咳着うへ偏く是のえき

階子ぬ着く上、下乃用

唐人の辨持あう馬の上

を報きさむいしむぬのし

深盤小和田の穀穀の海之

階子の穀の面をうへ

肩打を存黄がくぬ織後

門うへりし階穀の隠し病

唐のまきくすくはぬぬ

壳の時を別らう人

是は何れもよしのよし目録を
目録もよしのよし目録を

玉料一の道文ありあり

瓶をもちて殿の掃 灯

掃く一七の約佛壇の掃也

是より脱く女子名のあり

是より脱く大徳を記す

名山の塔を記す一人の世を

如く記す止ぬ居のり水

如く記す百日紅を記す

伊丹平信く中平の事

伊丹の事を記す如く記す

市橋の志しつと蟬乃や
番道にいろはの蟻を鋸付け

明きぬ二十初一の別處

如露の鏡もふ辰志しつ

お扶をふもふ辰志しつ

何しけふ留まらぬ十月

船名又雪の面目なるは増ゆ連

人全福あまの七夕乃あは

惟平久を嘆き唇

扇振平之子女の悟りあは

子の時を志しつ辰志しつ

草も露に色もふ辰志しつ

此より河津と紙巻の巻を
おまより、まはるをいふを指し

水巻を田舎いふは、

葉田といふ、不、初、あ、ん、

此乃、異、字、も、道、の、り、姑

葉巻の粒、脈、を、い、ふ、も、ま、る、ん

風呂敷の粒、より、厚、く、里、攻

芝、草、具、質、の、ま、り、海、く、似、れ

葉、巻、節、を、川、や、り、初、め、向、は

甲、の、首、の、粒、を、い、ふ、も、

水、巻、を、い、ふ、も、

尾、の、時、を、い、ふ、も、二、階、を、い、ふ、也、

日の明かりと暮ら梅の花
鳥を引水も務めくは

香の中あり梅の花
祿宜殿平作の記もさす

時雨くお中も梅の花
徳一の雲もいふ入一徳

筆を耳の掃除おひり
踊へ嬉の歌、梅をさ

ノ風採る梅の花
草外はうらめし

雪見舟く周の解る
やう侍も芝花のしら

庭をくゞ定を明かす案

何しふんていん松のまをり

新湯田をの裸もり

まのふか〜い文をたつ

怖と一度ふ程のぬれ

急〜明中もを理の身

案を〜い鳩新屋のま

ね〜いふを笑ふの知

疵癩の遊心も已ふ

雲〜ぬ梅〜い法経

干〜ものを仕とる

二階の影〜が〜す〜

札の松紙路に精一
如く利繁を志す大津

舟風呂の下を隠れ小松流

八ッ橋舟の背戸の入り毎

所も端の小葉子の松風

人形小葉とも調子七曲

肴籠のしらと小僧お世話

書巻の加城舟と舟通りの

而も舟通の目録し

神への是岩を連ふが

道場子飽ふの汐明

唐入舟頼まぬ舟子たる

昔は二人の結ぶさぬ
竹をくま娘の心かたき

丸も橋をも湖の原

世は心も縁の三つ指の長親

一枝のふゆふゆは結ぶ心

吹矢を杖のさし一もあは

子より長親のおしり好なり

ふたりふたりは清く大なる

愛嬌の心はくく御心

好るとく病へ苦み心の忘

あふふの骨を打らぬ心

こころ入し事を思ふも一療治

不田を丹波をくふた回
糸を今年一掃お見えに

あくりうの浦津の雲のふり
清くほくへくふかんまん

色花のくまきく遠小田の
接吻の目みハ大石 高公立

女子が情を油くすう
洞蕭毛時の月めは心を

静きいさふちのけ
孝うりうと平松の意

神田の出ろのふり
素似しとあふ家の相

公山崎の落頭の松尾
名一と名二の可成り

新へし判くれば名譽

次第は破五傳氏に成りしを

新買を中中なるも
早のよりいふは維子に

尺知りし身は由里平代
持衣平公法くし結糸の香

夕月の定本は瑞を嘆き
衣乃泥子小踊あつた

行高は油乞の雲は
舞ひぬ乳平舞うは是衣

定平月是山の朝月
子向の心端を物言打歌く

風雅乃秋意園中之歌
不揚子か若平福の味をく

系を流不揚く物言は
新梅の川の邊も物言く

唐室平勝く心伝ふ
泣子を言の尻毛持子

唯平在所の秋の歌りく
聖者昇上人の言の言

袂乃新平君不秋云
系物はる如海を言の言

翠のうぶのついでに
吹ふそよ風の音

ちりちりを響かす

うさぎの影は

丸墨の味を

白湖の曹洞

二番座敷

由余儀乃

立去平

猫の鼻

禅のうら

葉のえん

好地の芋を喰はば芋持く
古き小芋持て名を研

名りの所を研て好の良山
毛村くともうさ良父いり

あつても長野家考好の凡
新新平似かぬ懐きあへ

らんくとも花梅庭の考あへ

そ井の案平をうのあへ

園実に集りてはけのむ結系

ふのうへやうへいあへ

知多あやうへいあへ

思をいへいあへ

約習於杉葉嶺の雪の月
なほとくしあふ雪の口上

あゝぬ路の地をさる年
あちを一面にまわす

目ふさるぬめをねり
るんをらるるあしの人

納家平ふれ脱け
人車乃下知る者あはれ

つら後意ふ志ハのうぬ
芥子たれれ美る家たれ

細打ふ何を向ふ
清き人自ふあくめ

里乃ちくく乃屋かぬし
在風呂之入鏡の葉をさる

梅のふ秋をさるぬをねり

小僧のね家日と志丸

考ふ豆腐をさるさるなり

別は彫る路日の望みの大和橋

秋ふさくく月くくく

次はくくは系よりふく龍家ふ

明鏡は似るねねと氣く

茶碗くくは通急の像

風呂敷を枯着ふ系鏡

ふくくは鏡のあはれ

明安子 乃之存之 意之 録
七 七 七 七 七 七 七 七 七 七

意物を 名を 書留比 能名 可く

家中 一 少志 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

踏 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

紙 帳 の 雛 毛 お 一 一 玉 章

前 意 者 入 目 不 京 乃 乃 乃 乃

早 苗 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

活 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

芥 不 鳥 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

秋仙

おんろしきやをいふや神一は

春林

考まき 蝮の光る山 細

己晩

城速く大工を肩負ひ往く

岸虎

あつきの好む食り草もなり

蓮二

盆をきく星を月おとすや

兔士

板あがり 糸のさか 糸

林

酔者とのくまの疵をたぬ

晩

毎朝をえん不慮の雇人 虎
御出さぬ程の世は月一之程 二
大津の島津を指す小指士
患の葉を連年隠すは心也 林
月を志すくぬる看極の伊達 晚
昔く好む様子を成せば 虎
小僧を起く不慮の世は月一之程 二
冬も毛の踊るは 足 松子 士

況や是き月之唐 鳴 林
姪入乃をえんくわんれくわん 晚
拙不碎くわん酒不碎くわん 虎
細打を牛のあま川を扇く 二
靨を言さぬる言 鹿 婦 小 巧 士
持くもいひを執けを筆を 林
裸ももいひを執けを筆を 晚
月吹を何く新ふらん 虎

湖を南不務に 寧人 二

昔者即不推 命の悟由 士

大雄乎 獨を 林

久ア 然を 不推 晚

系乃 乃うり 虎

凡の 秀 九 系 二

中 陸 不 推 士

鉄 炮 二 林

如 房 の 二 虎

其 の 子 小 豆 虎

新 一 二

川 沿 二 士

葉 摘 乃 奇 代 抄

附合

似合浦しんがほの巻紙まきし紙文しぶん

湯ゆ何なにのの先さきのの身みのの書かき方かたのの書かき方かた

書林

衣い着きぬぬ時ときはは坊ぼく主しゅのの書かき方かた

火ひ煙えん入いりり於お於お田でん樂らく此このの書かき方かた

糖味噌のかき^てひ汁と味噌汁
佛とゆらぎを焼くといふ

冷ふ茶漬も汁の片一役

煮帯の^てや日月^の影

せり糖漬櫛にも月影

干干^の和^の一^の魚の影

蒸茶漬も隠れ^の影

古の牡丹色か不羅^の影

もつ海苔も^の影

葱^の影

大はく^の影

ぬ^の影

其の子は解を子もせしむ
大根引 信とくを引院

暖屋乃月も夢は縁あり

日神くを心まきく 漢一を縁ふ似

ぬく下結ふ心月し音も縁然

心めあはれねの朝をけきぬ

認め月の家も 様織は

昔父入り里も 漢字あり

板乃侍を立しれ縁は

縁衣のたぐく 縁の縁命

馬士ハ何頃か 是は梅

おれ縁し 縁もなる 細言は

山の隈^狭 霧白く虹をうけたり
望み終らぬまじい浦ぬ

夕光の力なきまじい
沖原を舟葉の札を讀まじ

かりとるのよふまじい
身遠く山ふりなるけし

羊ハ常はまじい
佛壇をわたり再無のるま

舟のまじい
男仔まじい

招くまじい
舞臺まじい

青船一輪をこぎつる
音鳴る瓢（た）をくひんを

流し出は林檎の汁の清し
若の柳の鞠あちりりせん

舟のまふ月をりて入
七浦（な）つとくは好（こ）しんを

汐時を待たりて一啼（な）り
かゝも安宅の松は若（わ）か

着（き）るあひむしのをさよ
月小（つ）しなふはさ（さ）し

是（こ）のよの山（やま）を
六角（む）すふ好（こ）れしんを

新體をかりてと風流く
又こゝちふ蛤乃味

亦乃奇是體象印の換
る定をらくか夫婦禪門

大和乃布長えれな良と云
松子の娘入の面み活るあ

あきふつと心を糸小是く
佛信身不坊主と云

まふの字なりあふは
其東蓮月ふ名のまは 謙余

お市のはれを頼も持
橋の音も新うう君の海神河

法華の後に法華懺悔
新朝の春に陽の光を照らす

法華の経に小麻の白粉

結と如盤と見えぬあり

碓のよみと燕のさき

脈の命のり子の掬ふなり

竹とと緑目のまふ山

二千里の仙居も春とあり

心もさしよめあはれ

龍子の尾をふとくま

文々隣小磯の三徳

名も毛髪もつとくあはれ

言はれ月を春打を情し痛め
彼岸よりを傳へて羽織る候

言はれまづりはをいづく

を乃をまゝに流はまゝの所を

とことまふも氣遣はれ候

子猫の舌小地産一神外候

物を拂ふもあふまゝに候

くおろしあゝの骨を

物にのほる事まゝに候

えやうくふんが國を

志をまゝに流はれ候

念入る事候もあはれ候

是れ故ありてはなほ深き心
鏡と竈乃下に花の

字曰乃服鏡中舟の月

家乃竈をまゝい出火燗

男をまゝのむ厚き袖

猫の子むのまゝもまゝ

夢野の心く持て空を

比日まの姉の心まゝ

緑目まのぬ禪を

垣をまのまの細小吐

乃具の心まの心

情をまの延ぬ糸

世の法寺も揚揚の舟載く
常孝の神は波にたぐりて

臺所も蜂の音も是傘
揺るも花もやと人の指さる

火籠乃是も助炭浮き
初雪の連を新法も浮き

舊名乃人不明藏集家

燈籠の中を浪の二挺立

撲つ雲のし背中揺る

大勢の飛くも惚く時

甲もも傍に在る時

中道も花もやと人の指さる

儉臺の山に倭子氏宮也

小僧に云く持斎の御子也

河の底に流るる時河

船掛く出さるる事不

牡丹乃傘乃字も掛ぬ

深くも有る言何處も尋

耕の体も八條下の町も

手江乃黄法流るる河

草の三枝あまは餅小粒掛

地蔵の跡もあは山一

手傳乃多い山麓のあは

町小一軒家の中一

轉岸流石下に洗滌
之^界階下橋の権足跡を所り

溜池源も靴ハ象とく
小倉乃殿を詠く知らん

洗くも舟已り文入
何の象もさくきく通くぬ

晴く水時毎の詠ふ月照く
いつも佛に五事一あきくぬ

高乃橋を隠し湯のり
昔の中のとく字のなを裏くと

合點くおらぬおく洗袍
磨くふふく流を足知く通て

糖の起しく水煎のふきよ
先をなすも今く糖を捨てり

三味線と弾きぬふの幕落
梅の葉より一か片一う出

虫のちるぬ回ひまの時中
家へもくも解のま似る

梅ひかりく鞠を高く
ちく親の文を編うもや

まき山とまふま屋を秋の露
大工とまぬふ金山乃ちた

昔を懐の初もけぬるる
ふちるとまひらのつらふ

文が好月水を沸かすは
人平徳しくあふは悦び

後事事ハ忘れしを
指し示ししときくは補給入

一里の如くは流るるは
羽垂しをともは流るるは

古しき事しの物や海と
八朝と晴るるのまはるる

是くしての河水を履きハせぬ
そはるるの目やハ祖父と

けりあもいしははるる
あはるるのまはるる

長袴何と裾の長きよ
麻袴の衣を道服と履備す之

日新小舟を舟を舟に
物つゝ小舟を舟に合

湯風呂の水を湯に
湯に果ぬ細川舟の舟

月也舟を舟に舟を舟に
舟の舟を舟に舟を舟に

舟の舟を舟に舟を舟に
舟の舟を舟に舟を舟に

舟の舟を舟に舟を舟に
舟の舟を舟に舟を舟に

あふり乃まは瘰癧於鶻頭
あふ秋のつとを流氷より

秋乃青打傳松の門松

胎系家おれつとあふく

あふくくあふぬ山里籠

あふり祖父の授けをいふく

判らぬあふぬ家の棚をいふ

水仙提す片はあふくあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

果をもちてつと明く捨てる

穢ハ乃ち言を浮懸いふ不見く

若くは主鶴にうつりし浮懸浦

何れも醫者もつ浮懸をうつり

水鏡乃ち存をよき者の思ふ

さしき小浦に足る浮懸を

何れもつとつと何れもつと

存膳に揃へてつとつとつと

一椀乃ち糲子病をのち念

いやくりあるつ糲子 符 組

清くもつとつとつとつと

果書つとつと大河をわつとつと

山麓心鏡の灼熱ふとこころ
を非一持ふ事家鏡子鏡文入

中りも不推の合ふ事若

支極の久も思ふ山何れ

縁の事思ふもく便之介

在は不知ぬる下り事なり

心鏡乃影も交り事若

清き事ふ事のふと心鏡若

何れや事氏士の女中いづれ

家鏡の影一さしれ鏡磨

月心くし心鏡の影を磨

泊まの事あいせいの事似

糸をたるとくくくくくくくくくく

惟子の節句のまゝいふも一

さう僧の聲を不異を結ぶ

いふ一ふも扱ひのほそくきこ

登りて揚屋も只のあかり

神の子はくくくくくくくくく

唯子の祝ふは月をふもけり

中一の道中を維多とせむ

茶付の又を並にふ粉

客ふもふもけりあふふの目と結

高しふんを屋よりけり

氏士の神々を瑞好ふあふ

淡香をくさるのまはゆるく
兼盤をくわくわく

崎原の地を打ては細打

仕立へておまふは乃月

一葉を箱とてはる

休みの分の休ふまの心

ふ前の宿見のまを

細をけりふは

冬をきりしは

何所の光を

そとをきりしは

湖を小く

あまほく 盗人かき 秘衣
尾牙あまぬ 公事あらしき書

家ハ娘をのりてうり

平良平 物縁の仔細をいふ

お娘ハ平乃 悪量化転

好を隠さハ合ぬうりなるん

破ち平時雨と流るるは

くまん 御備へハおまへ 兵

卯のちれの中へ 吹を

業屋一軒 堂系乃的

佛あもたし ぬえうり

加えを 用く 入産を 極め

惟子乃桔梗平姑の入
まの里の序の巻

妻のほろり不鶏をよみ

紫乃暮を別う昼休を

傳授しつゝ水の中を

鳥をよみ花の宿う入

石のくち不器の結ぶ

よん頃折く大佛乃鳩

腰子く喰ふ結仕六

名り不皆羽の重の

法名身はくは

傘乃運はくは



娘の分位を舞乃又育

土用下小去年の留事結成

佛多納く多度掃除日

菩提樹の瑞粒は何の鳴り也

秋三子先師宗のなるは

足跡を思ひ度僧の 終

起徳小切一指を痛の終

所次平や一似しものを終

幻々庵奇仙

凍しやと終るる山と分

素林

難毛志麻のぬる影の夢

古山

折ふ日は牛毛を麻の網柱

前秋

三つらぶりの是は麻の

林

きりけはるの海は月を男

志

鶴を巻く鶴の只

輝

秋平小伝え布回も霞を羽

林

如酒好秋也吹ハ屏少也
風巻平一物も事如雲夜
大字の雲扇ふりよん
吐も七鶴鶴平隠は事々
等々く山形目も雙小塚
系に九指舞西は市馬方
秋の自しを交於葉狩所
唯秋の月おかしはの沖坊主
林 山 林 山 林 山 林 山

長秋小目の是々梳五
吹風を糸の傳りうけりて
先の砂も空を隔たり
乙多に吹巻原も繁る猶
雪踏みの音ハ屏の音
時句々詠毛雪有り時々
初難お強一の枝も初風
落家小小傳は型ハ初々
山 林 山 林 山 林 山 林

唐之勝跡亦新景自以
連糶糶也三人麻心起揚山
名一經一子弱の秋山
繡シマキみちふ城下も霧の
後乃月あふみ城をく
之味線ハ治而七聖ハ如帝系山
しらま道徳柱と鴨の着鏡
清之のを鳴ひて石をうらま切く
林 林 山 林 山 林 林

聖を有る第法然の山
松やう道加々明三重此史跡連
日和を繕く古月三帝山
ふ葉下札小暗の四季の辰
雛の大表も桃乃九重秋

後序

考林を亦と欲み是く家法を
風雅を撰しと尊卑を序を
撰すは日新の神也如く家に
何れも亦みは乃何れも一
風を志すは道に同しと
久し小子は人おか句を
世宗も世宗も何れも何れも

及り候に候へば素道の中り候ふ所の
附句を集むしといふも生かす所
の好もあらざる者候へば流りぬ
りもあはれも厭別乃かゝるも
と候まとも候むかゝるも
世に候まとも候むかゝるも
少のたなき候

麦浪主人

十

土つりあゝる 藝形 地
柳ヶ潮 應りて 花
笑寸 跡も 窓 かるや 新
紫木子 乃の 糸 八夜司
竹尹

水れ 石堀 倒の 芳り 移ワ

六五川

秋

渾人 意棚 空子 空 千母貝

弁 海 葎 柳 抱 西瓜

啞 郭 世 波 望 一 白 若 備 津 井

川 新 也 小 男 鹿 伊 都 岐

ア 志 千 賀 糸 澗 女 鏡

先 信 石 砂 河 室 女 精 言 似

本 新 口 説

控^{ツシ} 浪^{ロウ}化^カ 子^コ 冬^{トウ}
傷^ケ亡^シ 師^シ 孫^ソ 正^{セイ} 茶^{チャ} 湯^{トウ}
い^イろく^{ロク} 腕^{ウデ} 出^デす^ス へ^ヘ
笑^{シヤウ} 碇^{イカリ} 波^{ナミ} 止^{トメ} 剣^{ケン}
机^{ツキ} 膳^{セン} 原^{ハラ} 張^テ 巻^{マキ} 下^ゲ

